



Title	都市にある環境アート : 機能性に見る一考察
Author(s)	神蔵, 理恵子
Citation	デザイン理論. 2007, 50, p. 164-165
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53016
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

都市にある環境アート

— 機能性にみる一考察 —

神蔵理恵子／京都工芸繊維大学大学院

本発表では、東京の「ファーレ立川」(1994年完成)とニューヨークの「Battery Park City (以下B P Cと略す)」(1988年敷地内に building community 完成)を例にとりあげ、アートがどのような実用的な機能を有しているか、さらにそれらが実用的な機能に加えてどのような効果を生み出しうるか、という点を検証する。

機能をもつアート

ファーレ立川は、「都市的機能」をアートにもたせるという設置理由を掲げている。作品は、ベンチ、車止め、街灯、サイン、ペDESTリアンデッキ支柱、建物の外壁、喚起口、換気塔、散水栓カバーなど、都市生活に必要な機能がアート化され、歩行者空間を中心に設置されている。B P Cに関してもベンチ、照明などの機能をもつ作品が多くみられる。

ここファーレ立川では、機能だけの役割を果たす変哲もないベンチや街灯、文字による案内看板が設置されるのと違い、機能をアート化することで、都市空間は変わり、都市生活は豊かなものになっている。そのアートの様相は、単に物質的機能をもつだけのものと違い、都市の風景の見え方を楽しいものにする。歩道にできた憩いの場である。

ファーレ立川に設置された Robert Rauschenberg の『自転車もどきVI』は、昼はサインボード、夜はネオンサインとしての機能を果たす。自転車置き場がそこにあることをアートで示す。このアートが設置されることで、文字だけによる味のないサインに比べて都市空間は楽しいものとなる。

Tang da Wu の作品であるが、この買い物かごそのものに機能はない。換気口という都市生活において必要な機能であるが、むき出しであると殺風景なものを、アートを使って隠すことで、楽しみに変えた。

環境との融合 — 空間との関わり

アーティストは個人の表象を発表する場として、美術館では物足らず、都市空間に進出し、多くの人に観てもらえることを喜びとした。しかしその全てが受け入れられたわけではなかった。そこで、都市の機能的要素を作品に取り込むことで、存在意義を確固たるものとしようとした。アーティストは都市的要素を加えたアートをどう表現し、都市空間において街を通る人に何をもたらしたのだろうか。一つは、作品を通して、視覚による場の記憶をもたらすという作品のあり方がある。

ファーレ立川に設置されている、坂口寛敏の『バーコードブリッジ』(図1)は、歩道橋としての機能をもつ。歩道橋の上に貼られたタイルがバーコードとなる。バーコードを使い、現代社会の有りようを問いかけ、鑑賞者に新しい感覚をもたらす。歩道橋を渡るというのは日常的な行為であるが、この歩道橋にバーコードというイメージを加えることで、「視覚」によりこの場を体験する。

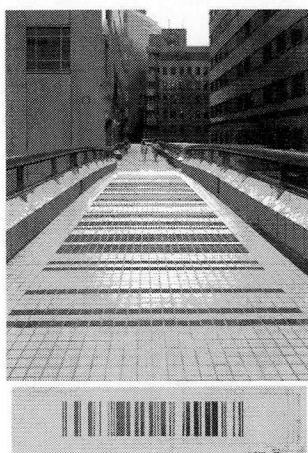


図1 『バーコードブリッジ』

B P C の作品、Louise Bourgeois の『Eyes』(図2, 3)は、ハドソン川を望むその場所に、目玉が一組設置されたものである。公園の中に突如現れた作品ではあるものの、この作品は鑑賞者に目の前に広がる、目玉の視線の先のハドソン川および自由の女神の存在の再認識を促す。作品によって周囲の景色を認識させる。自由の女神を見るという何気ない体験を、「Eyes」という作品を通して鑑賞者の「眼球」で見ること、ここで見たという体験が深く記憶される。

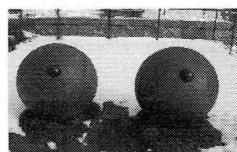


図2 『Eyes』

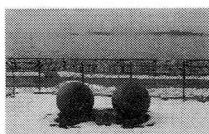


図3 『Eyes』

都市におけるアートの存在理由のひとつは、体験を通して空間と人間との間に新たな関係を生み出すものであることである。体験を通してその場を記憶し、その体験の仕方が、都市に生活する人々に、生活の豊かさをもたらす。これが機能を越えたアートの力である。

おわりに — 都市に設置される環境アートのあるべき姿

都市にあるパブリックアート、それは次の二つに分けられた。一つは、ベンチや車止めなど実用的な機能をもつアートである。これは都市空間の中で、機能をもった上で、単なるベンチ、単なる車止めではなく、生活をなごませ豊かにするものである。機能があり、かつ、人々の生活を豊かにするように、アートになっている作品である。これらは都市生活を豊かにし、都市の風景の見え方を殺風景なものから楽しいものへと変える。

二つ目は、都市に必要な機能はないが、そこにこれらがあることで、人間が、視覚や聴覚という知覚で実感的にその場所を記憶する手段となるものである。これらには、ベンチや車止め等の都市空間に必要な機能はないが、その空間にアートがあることで、空間と人間との関係をより深め、空間と人間の新たな関係を生み出す。ここでは、場の context を一緒に体験する、『バーコードブリッジ』や『Eyes』を例として取り上げた。そこに人が立つことで、空間と人間との関係は深まり新しい展開を見せる。

今後、都市空間にパブリックアートが広がっていくとき、この二つの方向をとっていく可能性が示唆できる。

◆使用した図版については、図2は『フェーレ立川アートプロジェクト』より複写、他は筆者撮影。